

Title	VCの視点から捉えたアーリーステージにあるベンチャー企業の将来性評価
Sub Title	
Author	覚張史子(Kakuhari, Fumiko) 鈴木貞彦
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1999
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1999年度経営学 第1497号 可能
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001999-1497

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

所属ゼミ	鈴木 研究会	学籍番号	89828210	氏名	覚張 史子
(論文題名)					
VCの視点から捉えた アーリーステージにあるベンチャー企業の将来性評価					
(内容の要旨)					
<p>ベンチャーキャピタルに期待されている社会的役割は、ベンチャー企業へのリスクマネーの供給である。しかし、日本のベンチャーキャピタルによる投資行動は、組織として完成度の高い公開目前のベンチャー企業への投資が中心となっている。一方、リスクマネーの需要側であるベンチャー企業では、設立5年以内のアーリーステージにおいて資金需要が旺盛である。この状況は、リスクマネーの需給ギャップが存在していることを意味する。すなわち、ベンチャーキャピタルが本来期待されている社会的役割を果たしていないからこそ、そのような状況が生じているといえる。</p> <p>現在、低迷する日本経済の活性化の担い手としてベンチャー企業に期待が寄せられ、政府等はインフラの整備に余念がない。しかし、ベンチャー企業が一番資金を欲しているアーリーステージにリスクマネーが供給されないままでは、どんなにインフラが整備されても結局はベンチャー企業の発展、引いては日本経済の再生と活性化にはつながらないであろう。日本のベンチャーキャピタルがアーリーステージのベンチャー企業への投資に消極的である理由として様々な要因が考えられるが、その内の1つとして、その将来性を評価する適切な方法を持ちえていないことを挙げることができる。そこで本論文では、どのようにしてアーリーステージにあるベンチャー企業の将来性を評価し、一定の投資収益を獲得できると期待される先を選別するかについてのフレームワークを提案することを目的としている。</p> <p>ベンチャーキャピタルの投資に見合うアーリーステージにあるベンチャー企業を見つけ出すということは、別の言い方をすると、ベンチャー企業がアーリーステージにある段階で、ファンドの満期までにベンチャーキャピタルが高成長を遂げると予想される先を見つけることである。そう考えると、フレームワークを作成する上でのステップとしては、①アーリーステージにあるベンチャー企業の将来の業績に影響を及ぼす要因とそうでない要因との判別、②その要因と業績との関係、といった2点が重要となる。よって、本論文では、これら2点に関する仮説を立て検証した。</p> <p>仮説の検証結果としては、「外部アドバイザーの有無」といった変数が、高成長企業と低成長企業とを区分するのに最も有効なものとなった。そして、ここでいう「外部アドバイザー」とは、起業前から付き合いのある身近にいる企業家のことを指していた。その他にも、仮説の検証を通して、高成長企業と低成長企業とを区分する際に有意義と考えられるいくつか示唆された点が考察された。</p>					